

琉球大学学術リポジトリ

【特集】第7回、第8回観光科学研究会： 観光科学の特殊性と普遍性(2)、(3)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2017-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 典男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008521

【特集】 第7回、第8回観光科学研究会 観光科学の特殊性と普遍性 (2)、(3)

概要

本研究科の名称に「観光科学」を冠した理由について、「琉球大学大学院観光科学研究科（修士課程）設置計画に係る再補正計画書」（平成20年11月20日）は以下のように述べている。

「本研究科は、新しい観光振興を旨としている。つまり従来の文系中心の観光学ではなく、社会的側面、ヘルスツーリズムや自然環境保全など理系のアプローチを含む文理融合の学際的アプローチから観光事象を理解するもので、この多面的・融合的アプローチは『持続可能な観光』を実現する上で不可欠である。つまりカリキュラムは複数のディシプリンが融合したものであり、これらはそれぞれの立場から科学的に観光事象を解き明かそうとするものである。このような観点から、本研究科の特徴を端的に表現するため、「観光学」ではなく「観光科学」を用いた。」

さて、本学は現在、研究教育組織（大学院）を全学的な視点から見直すべくタスクフォースを設け検討を進めている。こうした組織改革の只中であって、改めて本研究科の設立趣旨を読み返すとき、新たな学問体系として「観光科学」を創設しよう、という先人たちの強い決意に、思いを致さざるを得ないのである。

例えば「文化人類学」の立場から、「経済学」の立場から、或いは「建築学」「生物学」「医学」「経営学」「社会学」「教育学」等々の立場から観光を研究対象とするだけでは、各々独立したディシプリンの単なる寄合所帯に過ぎず、1つの学問体系として「観光科学」が成立したとは言えないであろう。

様々な要素が複雑な関係性をもつ観光現象を、本質的に理解するためには、各ディシプリンの基本理論・研究方法・専門用語・研究成果を学ぶのみならず、これらを統合知とするホリスティックアプローチによって要素還元主義的なパラダイムからの転換を図っていかなければならない。しかし、その具体的な道筋はまだ見えず、前途は茫洋としている。

こうした本研究科設立の趣旨や問題認識を踏まえ、本研究科では2014年度から「観光科学の特殊性と普遍性」をテーマに観光科学研究会を開催し、専門分野・学問領域の異なる本研究科教員により研究報告を行ない、新たな知識体系としての「観光科学」の成立可能性を検討してきた。

2015年度は、下記のとおり2回の研究会を実施し、ツーリズム・デベロップメント領域、ツーリズム・リソースマネジメント領域の各教員が研究報告を行うとともに、その関連分野を専門とする学内外研究者からコメントを頂いた。これらの先生方のご協力に感謝を申し上げるとともに、複雑系としての観光を統合的に説明することの難しさと、研究教育組織の見直しと並行して「観光科学」の確立に向けて今後も継続的な努力が必要であることを、改めて認識した次第である。

なお、松本品子氏の報告に係る論文「総説：観光による自然資源への正負の影響」については、査読を受けたため、「研究論文」として本紀要に掲載している。

平野 典男

日時：2015年12月16日（水）9:30～12:15

場所：琉球大学文系総合棟703教室

内容：

① 野外研究から観光の現場へ

松本 晶子（琉球大学大学院観光科学研究科・教授）

② 松本報告へのコメント

山崎 秀雄（琉球大学大学院理工学研究科・教授）

③ 観光科学と観光学

金城 盛彦（琉球大学大学院観光科学研究科・教授）

④ 金城報告へのコメント

比嘉 正茂（沖縄国際大学経済学部経済学科・教授）

⑤ 観光景観学の構築に向けて

波多野 想（琉球大学大学院観光科学研究科・准教授）

⑥ 波多野報告へのコメント

小野 尋子（琉球大学工学部環境建設工学科・准教授）

日時：2015年12月16日（水）9:30～12:15

場所：琉球大学文系総合棟703教室

内容：

① 環境学と観光学

飯島 祥二（琉球大学大学院観光科学研究科・教授）

② 飯島報告へのコメント

直井 岳人（首都大学東京 都市環境学部 自然・文化ツーリズムコース・准教授）

③ 観光の教育力の構造化に向けて

大島 順子（琉球大学大学院観光科学研究科・准教授）

④ 大島報告へのコメント

寺本 潔（玉川大学教育学部教育学科・教授）